主日の福音 2025/9/28(No.1376)

年間第 26 主日（ルカ 16:19-31）

あなたは今日、ラザロの話をしましたか

今週の朗読箇所は有名な「金持ちとラザロ」のたとえです。いろんな示し方が考えられると思うのですが、金持ちが必死になってお願いしているのに結局何も変わらなかったのはなぜだろうか。何が足りなかったのだろうか。そのことを考えてみたいと思います。

「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。」（16・24）当然のことですが、自分が苦しい目に遭ったら、自分の苦しさを取り除いてもらいたいです。自分のことしか考えられない。それはそうでしょう。

この願いは完全に打ち砕かれます。自分のことしか考えられない人は、神の国の宴席に招かれることはないのです。金持ちは、自分がいかに自分のことしか考えずに毎日遊び暮らしていたかを思い知らされます。

すぐに、金持ちは頭を切り替えました。兄弟のことを考えたのです。もしかしたら兄弟たちも、たいして変わらない生活、自分のことしか考えず、ぜいたくに遊び暮らしていたのかも知れません。そうなるとほぼ間違いなく、死後は自分と同じ境遇になります。ここでようやく、近い隣人のことに思いが至りました。

しかし、彼を諭す人として現れたアブラハムは、聖書の教えに耳を傾けさえすれば、十分滅びの道から免れることができると、金持ちの提案を退けます。もう一人登場しているラザロは、この世の中で最も貧しい人ですが、たとえばイザヤ書 58 章には貧しい人に果たすべきわざがちゃんと書かれてあります。

「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて、虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は曙のように射し出で、あなたの傷は速やかにいやされる。あなたの正義があなたを先導し、主の栄光があなたのしんがりを守る。」（イザヤ 58・6-8）

金持ちであれば、教育も十分受けているはずです。当時の教育とはすなわち聖書の学びのことですが、「律法と預言者の書」を十分学び、実践する機会も余裕もあったのです。もちろん、残されている兄弟たちもそうです。だから、死者が生き返ってなどというあっと驚くことを持ち出す必要など無いと、却下されたのです。

実はイエス様も、次のような言葉を残しています。「自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。」（マタイ 5・47）自分が生き残ることだけ考えてもダメ、兄弟が生き残ることを考えたとしても

まだまだ不十分で、最後はここまでたどり着かなければならないと、イエスは続けています。「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」（同 5・48）

そこで、ラザロのことを考えてみましょう。金持ちは、ラザロを受け入れていれば、きっと宴席に加われたはずです。ラザロとはいったい誰のことなのでしょうか。単に、できものだらけの貧しい人、金持ちの門前で、食卓から落ちる物で腹を満たしたいと願っている人のことでしょうか。

最初は文字通り考えてみましょう。食卓から物が落ちる状態とは、どういう状態でしょうか。よほど、料理を並べすぎて、食卓からその一部がこぼれ落ちたのでしょうか。これが、ラザロが期待していたものでしょうか。そうかもしれませんが、もっと違う何かかもしれません。

ラザロは、何も頼るもののない人の代表でしょう。しばしば、何も頼るもののない人は、神にのみ信頼を置く人と同一人物です。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」（ルカ 6・20）その、神にしか頼ることのできない人ラザロに金持ちは目を向けなかったのです。

金持ちも、一日中家から一歩も出ないわけではないでしょう。するとラザロ、神にしか頼ることのできない人が、視界に入ったはずです。それでも金持ちは気に留めなかった。施しのわざをおこなっていたら、結果は違っていたでしょう。神にしか頼ることのできない人を、その日のどこかで気に掛けていたら、金持ちも宴席に招かれていたでしょう。

同じことが私たちにも問われています。私たちはさすがに自分のことしか考えない人は少ないかもしれませんが、せいぜい考えて家族のこと、ここまでしか日常の話題にしない人はいるかもしれません。しかし神にしか頼ることのできない人、日夜神に叫びを上げている人が確かにいるのです。その人たちのために、私は今日何をしただろうか。

一度だけ、フィリピンに体験学習に行ったことがあります。一週間、ホームステイをしました。驚いたのは、自分たちでは生活できない家族を、車の運転手にあえて雇って部屋を与え、住まわせていました。そして食事の祈りの時に、それこそ神にしか頼ることのできない人を思い起こして、ゲストの私たちと食事をしたのです。

この通りせよということではありませんが、今日私は、神にしか頼ることのできない人、つまりラザロのことを心に掛けただろうか。今日、家族みんなで、日々神に叫びを上げている人のことを話題にしただろうか。振り返ることにしましょう。司祭館の食卓では、ニュースで報道される日々命の危険にさらされている人の話題だけでなく、赴任した教会で、助けることのできた人、助けてあげられなかった人のことを話題にしたりします。

今も、誰にも気付かれない境遇で神に叫びを上げている人がいます。どうかこのミサの時間だけでも、思い起こし、その人から逃げない、背を向けないと、心に決めましょう。あなたは今日、あなたにとってのラザロを話題にしましたか？

年間第 27 主日(ルカ 17:5-10)